

卯年のお話し

ウサギは月天の使者、月読尊の神使

神社の石灯ろうの上端にはふつう宝珠が載っているものですが、田主丸町の月読神社の境内には、ウサギを載せた二対の石灯ろうがあります。

この神社は別称「サンヤさん」の呼び名で親しまれています。祭神の月読尊は天照大神の弟神にあたります。イザナギノミコトが筑紫の日向の橘の小門の櫓原で禊祓をされたとき、左の眼を洗うと天照大神が、右目を洗うと月読尊が生まれま

した。ですから月読尊は月の神様であると同時に、目の神様として信仰されました。久留米市の篠原正一氏は、「正月、五月、

聞きました。信仰は生きています。

月の出を待つ行事が「月待ち」です。十五夜・十七夜・十九夜などがあり、中でも盛んなのが二十三日です。三夜待ちとも三夜です。三夜待ちとも三

夜供養ともいわれ、サンヤさんとして親しまれています。それに参加する集団を二十三夜講といい、講員が寄り合って飲食を共にし、月の出を待ったとい

います。満月の夜、月を見て、ウサギが餅を搗いている姿を連想するのが日本人ですが、これは「餅搗き」と「望月」の語呂が似ているのと関連がありそう

です。このように、月とウサギは密接な関係にあり、月神とは月読尊（月弓尊）のことですが、久留米市御井町、高良大社に祀る高良大明神も一説では月神（月天子）といわれて

います。高良の神の本地は勢至菩薩とされていていますが、二十三夜講で勢至菩薩を祭るところもある

そうですから、高良の神と月読尊、サンヤさんは案外共通の特徴もあるよう

です。ウサギは、「ウサギとカメ」「カチカチ山」「因幡の白兔」などに登場し、知略に

筑後市 坂田 健一

長けた動物として紹介されます。時には慢心の結果「ウサギとカメ」のように、また機知に溺れた「因幡の白兔」のように、大失敗することもありました。

「皮を剥がれて丸裸」の伝説は小学校唱歌で有名ですが、その白兔海岸は鳥取から北西2キロメートルの所に位置し、海岸の南側、小高い森の丘上に白兔を祀る白兔神社

もあります。ウサギの飼育小屋は小学校などによく見られましたが、家庭でも好んで飼われた時代がありまし

た。東京では、明治四年秋頃から翌年夏にかけて、まるで熱病にとりつかれたかのように、争って飼

い始め、ウサギの値段も一夜にして数倍に跳ね上がったという事です。雄の子ウサギは五円か六

円なのに、雌で種類が毛色更紗形とか、垂れ耳、大耳などは五十円から数百円もする有様で、「ウサギを抱えた人々は仕事

百年」とか。この筑後地方ではどうだったのでしょうか。

ウサギは童謡にもしばしば登場します。「待ちぼうけ」「あわて床屋」「ふるさと」「ウサギのダンス」「靴が鳴る」等々。ウサギは、子供たちにとっても身近な存在

です。歴史上の人物では天武天皇・源頼朝・義経、文豪には幸田露伴・尾崎紅葉・夏目漱石・正岡子規・直木三十五が卯年生

私の行きつけのお店

かぶとまんじゅう

土橋の終点で西鉄電車を降り黄色に黒のかぶと饅頭の看板を見ると故郷に帰ったとホットした。

珠算道場の帰り、自転車を横づけして食べる熱熱のかぶと饅頭は天にも昇る味だった。福島へ出た

おみやげにかぶと饅頭を手に入れた。かぶと饅頭の思い出はそれぞれの胸奥にセピア色にな

って納められている。半世紀前八女地方を代表する都会であった福島町の食文化を彩る一つがか

八女農業高等学校

森林には、排出される二酸化炭素を吸収して地球温暖化を抑える働きをする環境の保全や、降雨による土壌流出を抑える土壌保全、土壌中に貯えた雨水をゆるやかに川に流して流量を安定させる水源のかん養や水質の浄化などの役割があります。このような大切な役割をもつ森林での実習を毎年行ってきました。昨年11月黒木町の本校演習林で、1年生全員が実習を行いました。昭和15年に串毛にスギやヒノキが植林され、その後、在校生による下草刈り実習が半世紀以上も受け継がれてきました。

生徒たちは、初めて持つ長鎌や鋸を使って、シダやいばら等の下草を刈ったり、間伐を体験しました。慣れない作業に苦労しながらも学校の歴史と伝統を肌で感じていました。



1月の校内販売所(八女農みらい館)の開館日 14日(金)、18日(火)、21(金)、25日(火)、28日(金)販売時間は、10時30分~12時30分です。多くの皆様のお越しを心からお待ちしています。

夜明け前

NHK大河ドラマ「龍馬伝」が大好評を博して終了した。龍馬役の福山雅治が、あまりにも恰好良すぎて、現実離れしている感があったが、それでもその時代設定に惹きつけられ心が踊った。近代日本の夜明け、新しい時代の始まりの一翼を担った坂本竜馬(龍馬)の人生は、とてつもなく重く、激しかった。

私は学生時代に読んだ、島崎藤村の小説、「夜明け前」を思った。明治維新前後の時代を背景に、藤村自身の父の生涯をモデルとして描いた長編小説で、封建制から近代社会へ移る過渡期の、制度や思想の変革が綴られた重苦しい作品だった。実際に、藤村の父親が

狂死したことを知って、大きな衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えている。どんなに天変地異が起るうとも、夜明けの来ない一日は無い。否、夜明けは必ず来るものだ、人は誰でも信じていたい。真つ暗な夜が明ける時、東の空が少しづつ白み始め、うす明るくなってくる。そして一

気に陽は昇り、辺りは白日の下にさらされる。だからこそ、夜明け前が最も大切な時間に思われるのだ。私は遠い昔、初恋の人が言ったことを不意に思い出していた。

「夜明け前が、一等暗いんだよ」

蓉子

